

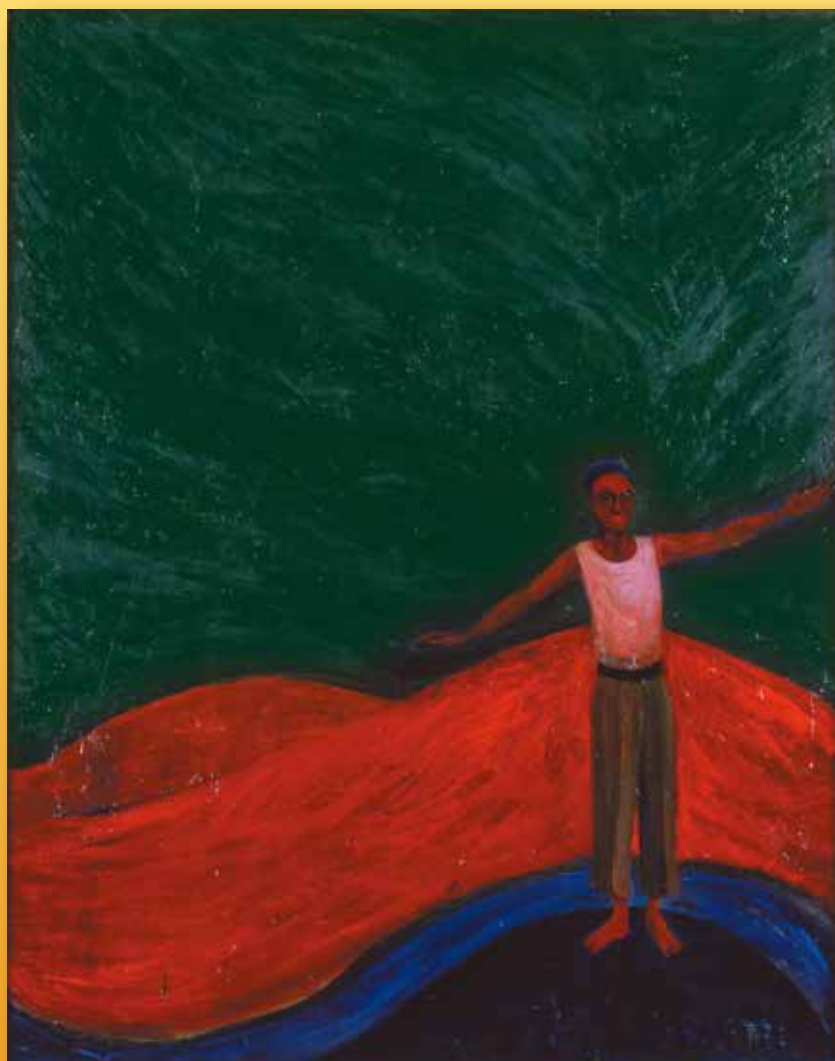
Symphony



足利市国際交流協会 会報「シンフォニー」

66

2017.8.25



篠原道生「人は何故に立ち生まれ生くるのか」

1990年 油彩・キャンバス

特集

中学生のグローバルな心を育て10年
国際理解促進出前講座

特集

中学生のグローバルな心を育て10年 国際理解促進出前講座



グローバル化社会を生きるために必要な資質や能力を養うことを目的に、学校教育の中で行われている「国際理解教育」。

本講座は、この一環で平成20年から市内の全中学校の1年生に“出前”しているもので、今年で10年目となります。この間、11,489名の生徒が受講しており、今では当協会の宮崎書記と崔書記が講師を務める恒例の授業として評価されています。講座は『足利市の国際交流と世界』と題して、足利の姉妹・友好都市の紹介はもとより、外国人人口、世界の学校生活・使用言語・あいさつの仕方、そして同世代でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんのことなど、多岐に亘っています。

今回の特集では、紙上講座として、中学生の関心が高い、崔書記の母国“中国の学校生活”と“マララさん”をフィーチャーしてご紹介しましょう。

中国の学校生活

中国の学校は、そのほとんどが公立で、男女共学です。貧困の子どもたちのために寄付により運営されている「希望小学校」や、試験によりエリートしか入れない「重点学校」があります。また、親の共働きの多いため、全寮制の学校もあります。

小学1年生から、午前、午後とも4時限（1時限：40～50分）の授業が行われています。中学生からは、夕食後に学校へ戻り、夜の授業を受けます。高校では夜の12時まで授業を行う学校が数多くあります。



パソコン完備の教室

洞窟内の教室



中国のほとんどの学校には、体育館やプール、料理室、図書館などはなく、また、写真に見るとおり、田舎と都市の学校の格差が大きくなっています。

授業中、私語は絶対に禁止で、挙手は必ず直角にしなければいけません。また筆記しない時には、手は後ろ又は前に組んでおきます。

給食がある学校とない学校があり、給食がない学校では家に帰って食べたり、近くの売店で買って食べたりしています。そのため毎日お金を持って登校します。

昼休みは1時間半から2時間くらいあり、食事の後に昼寝をしたり、校庭で遊んだりします。昼寝専用のベッドを完備してある学校もあります。



▲授業中の挙手



昼食



給食



机の上で昼寝

登下校の時、学校の周辺は送り迎えの保護者たちと車で大変混雑します。学校がない田舎もまだたくさんあるため、片道に何時間もかけて、遠くまで通う子どもたちがたくさんいます。

また、学費が払えず学校に行けない子どもたちも、まだ数多くいます。



崖の通学路

登下校時の渋滞



中国語クイズ

さて、ここでブレイクタイム。下の中国語の意味をお答えください。手紙？これはもうお分かりですね。答えは6ページのインフォメーションにあります。日本語とは大違いですね。

手
老
大

紙
婆
家

大
勉
強
娘

マララ・ユスフザイさん



パキスタン

現在 19 歳の
マララさん
2012 年 10 月
(当時 14 歳)
タリバンにより
銃撃される。

ここで、女性が教育を受ける権利を訴え続け、2014年に、最年少でノーベル平和賞を受賞したパキスタンの少女を紹介しましょう。マララ・ユスフザイさんです。

マララさんは、2012年10月、パキスタンの北部で通学途中にタリバン武装勢力に銃撃され、重傷を負いました。タリバンはアフガニスタンで、長い間女性の権利を侵害してきました。武装勢力は、マララさんが住むパキスタンの北部を事実上支配下に置き、女性への教育を禁止しました。マララさんは、全ての子どもが教育を受け、女子も差別されことなく学校に通う権利があると訴え続けていたために、狙撃されたのです。

マララさんは11歳のころからブログや海外のメディアで、「女子だからという理由で差別を受け、学校に行けないということがあってはならない」というメッセージを世界に発信してきました。タリバンは、そうしたマララさんの影響力を嫌い、マララさんの声を封じてしまおうとしたのでしょう。マララさんは、イギリスの病院で治療を受け、奇跡的に回復しました。タリバンはマララさんへの攻撃をこれからも続けると脅迫していますが、マララさんはそれに屈することなく、女子が教育を受ける権利を訴え続け、様々な活動をしています。



世界では、約6700万人の子どもが学校に行っていません。その半数以上が女子とされています。その原因には児童労働や、10歳、11歳という子どものうちに無理に結婚させられる若年結婚などがあります。日本では想像し難いかもしれませんが、背景には、貧困問題、つまり子どもも働かなければ生活できず、家族全員を食べさせることができないため、金銭的な見返りを求めて子どもを結婚させてしまうという事情があります。

教育を受けることは当然の権利であるはずなのに、子どもを安い労働力とし、女性に教育はいらないという、子どもや女性の人権を軽視する考え方が、世界には今も根強く残っているのです。

国連本部での演説 (2013年7月12日)



マララさんは2013年7月12日に国連総会で演説し、女性が教育を受ける権利を訴える提言書を、国連事務総長に手渡しました。その演説の中でマララさんはこう訴えました。

「タリバンは銃弾で、私たちを黙らせることはできませんでした。弱さや恐れ、絶望は消え、強さと勇気が生まれました」

「今もなお何百万人もの人たちが貧困、不当な扱い、そして無学に苦しめられていることを忘れてはいけません。何百万人も子どもたちが学校に行っていないことを忘れてはいけません。無学、貧困、そしてテロリズムと闘いましょう」

Let us pick up our books and pens.

本を手に取り、ペンを握りましょう。

They are our most powerful weapons.

それが私たちにとってもっとも強力な武器なのです。

One child ひとりの子ども、One teacher ひとりの教師

One pen and one book can change the world

1本のペン、一冊の本、それで世界が変えられます。

Education is the only solution, Education first

教育こそがただ一つの解決策です。教育を第一に…

今年19歳のマララさんは、4月に、史上最年少で国連平和大使に任命されました。現在は、イギリスで大学入学の準備をしながら様々な活動を続けています。

マララさんの目標は、「すべての女子が初等教育だけでなく、中等教育も受けられる」というものです。

皆さんも今後のマララさんの活動に注目してみてください。

受講生のアンケートから

受講生のアンケートには、世界の学校や言語、習慣など文化の違いに触れ、グローバルな視野を開かれたことや、同世代のマララさんの勇気ある言動にとっても感銘したことなどが寄せられています。

【世界の学校や挨拶の仕方、足利の姉妹都市のことが、とても良く分かりました。また、世界には勉強がしたくても紛争などのせいでできない人や、女性に勉強はいらないと差別を受けている人もいるということを知りました。ありがとうございました。(K君)】

【今日は本当にありがとうございました。今回の出前講座で、知らなかったことをたくさん知ることができました。私は、アメリカのスプリングフィールド市が姉妹都市であることは知っていましたが、中国にも友好都市があることを初めて知りました。また、中国語の「手紙」や「老婆」などの意味にもとても驚きました。(Nさん)】

結びのメッセージ

日本人としての思いやりの心、日本人としてのマナー、伝えなければならない日本の歴史・文化・習慣を正しく学び、まず、日本人が日本を知ること、それが国際交流の第一歩です。

「文化疲労」と異文化体験

副会長 高久保 勲

現在足利市に在住している外国人の数は、4,000人を超えています。100人の市民が集まれば、そのうち2～3人は外国人ということになります。県や市は多文化共生の地域づくりの推進を掲げ、日本人と外国人が共に安心して暮らすことのできる地域づくりに取り組んでいます。また、オリンピックを間近にひかえ、beyond2020を通じて、訪日外国人にとっての言葉の壁を取り除く活動を推奨しています。足利市国際交流協会では、様々な交流イベントや日本語学習、必要な生活関連情報の提供など、在住外国人がスムーズに地域に溶け込むための支援活動を行っています。しかしながら、外国人にとって暮らしやすい地域づくりはなかなか難しいのが現実です。

初めて海外に行ったときの不安と緊張は今でもよく覚えています。慣れない英語は、音楽のように耳もとに響くだけ、会話の時は「スピーク スローリー」と頼んでも初めのうちだけで、直ぐに元のスピードに戻ってしまいます。集中力を研ぎ澄まし、断片的な単語から内容を理解しようとするのですが、やがて疲れきってボーとなり、部屋に閉じこもりがちになってしまいます。楽しいはずのホームステイもしんどいだけで、憂鬱な体験でした。このように異文化・異言語に接したとき、憂鬱になったり、イライラしたりする体験や症状はどうやら私に限った体験ではないようです。後になって知ったのですが、心理学では、これを「文化疲労」(culture fatigue) というのです。

一般にいうカルチャーショックです。個人がカルチャーショックに陥ると、身体的な不調になるだけでなく、精神的にも悪い影響が出てきます。夏目漱石がロンドンに留学したときのようなもので、異文化が自分を拒否していると感じ、疎外感、不快感に襲われていきます。極端に相手の国をけなし、自文化中心主義に陥っていく傾向になります。これではせっかくの異文化体験もマイナスになってしまいます。

異文化体験はこのように困難で、痛みを伴うものですが、まさにそれでこそ海外での生活は意味があるのです。「文化疲労」に耐え、それを克服すること、さまざまな欲求不満や葛藤に耐え、自他の文化の違いを客観的に捉えることにより、合理的な解決を求める力を持つ契機となるのです。異文化体験により文化の違いを知る人は、グローバル化した世界が求める人材といえるのです。近年、特に男子の海外留学熱が冷めている傾向は日本の将来にとっては心配なことです。



アメリカ・リッチモンド高校
(左・お世話になったブルックス先生)にて

総務委員会

「素通り禁止」と国際交流

委員長 岩佐 富男

1. 足利市は、「素通り禁止」というキャンペーンを展開している。これは、観光客が足利市を“素通り”して他に行かないように、という願いで始まったようである。“禁止”という言葉が面白い。
2. 翻って、最近のニュースを見ると、“素通り”されて、いじめられていた中学生が自殺したり等々、生活の場である地域、学校、職場等の様々なコミュニティで、本来の“繋がり”の崩壊が急速に進んでいる。
3. 「素通り」は、“見て見ぬふり”のことであり、法的には「不作為」とされる。刑法では、作為義務者がその義務に違反すると「不作為犯」とされる。会社法では、第369条第5項で“議事録に異議をとどめないものは、その決議に賛成したものと推定する”と規定する。“私は賛成しなかった。黙っていた。”では済まないのである。議事録に、「反対」と記載しなければならないのである。
4. 世界では、貧困、格差、差別、ヘイトスピーチ、環境問題、戦争、基地問題、テロそれに共謀罪や憲法問題等々、枚挙に暇がない。我々は、“見て見ぬふり”をしていないだろうか？日本人は、いつから、仲間を“忖度”しないで、冷たい“自己中心的人間”になってしまったのであろうか？
5. 国際交流は、“素通りせず”に“見るべきものを見て、お互いに“忖度”し、手を携えていくことである。そういう意味でも、足利市の「素通り禁止」が、世界中に広がることを強く望む。

素通り
禁止
足利

地域委員会

Symphony

「愛の反対は無関心」

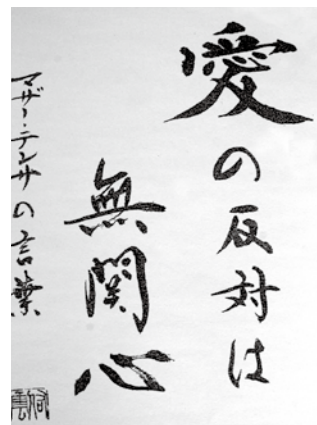
委員長 鈴木 光尚

地球サロンの企画が進行中です。7月8日（土）には「ネパール・ランタン谷を訪ねて」をテーマに、足利山岳映画会代表の石川 勝さんが、現地で撮影した映像を交えて熱弁をふるってくれました。

9月16日（土）には、地域に根づいて多彩な活動をつづけている佐野市の「国際交流たみの会」（ジョン・デイリー代表）の皆さんをお迎えして、草の根の国際交流のノウハウやポイントをお話しいただきます。

11月18日（土）は、足利市民活動センター企画展（7.18～7.27）で話題を呼んだ「女流ことのは書展」の田中佑雲さんに、書展出品作の原典である世界と日本の女性たち約二十名の中から数点を選んで、詳しく「言の葉」の神髄をお話しいただきます。私が感動した「言の葉」を世界と日本から一人ずつ紹介するとすれば、こうなります・・・マザー・テレサ～「愛の反対は無関心である」「何もなくてもいい。そこに苦しんでいる人がいることを知るだけでいいのです」「わたしたちにとって大切なのはひとりひとり

です」「あなたがちょっとほほえむだけでいいのです。新聞を読んであげると喜び目の不自由な人も、買い物をしてあげると喜び、重い病気の母親もいるでしょう。小さいことでいいのです。そこから、愛は始まるのです」・・・緒方貞子～「国際社会で言葉はとても大切だ。しっかりした言語能力がなければ、実のある活動はできない。自分の意思を伝えたり、用を足す手段としてだけに考えず、相手の文化を学ぶ材料と捉えるべきだ。さまざまな言い回しに、その言語を生んだ文化がそのまま表れている。言葉とは文化であることを自覚して学び、使うことが必要だ」・・・等々、女性たちの「言の葉」の豊饒さに感動しきりである。



友好交流委員会

Symphony

「姉妹都市交流ポットラックパーティー」

小竹 直美

毎年この時期に、姉妹都市であるスプリングフィールドからの訪問団がお見えになり、ポットラックパーティーを開催します。

我が家も、子どもが学生だった

時には、スプリングフィールドの子どもたちをホームステイで受入れたり、引率の方をホームビジットでご招待して日本の家庭料理をご馳走したり、交流を深めてきました。今は子どもも成人し、最近はポットラックパーティーのお手伝いをさせていただいています。

日本の伝統的な体験につながる「餅つき」はやはり海外の方には人気です。

そして足利の伝統文化の「八木節」も、今回はなんとロック調アレンジで「こんな八木節もあるんだな～」と思いましたが、外国の方たちには受け入れやすかったのかもしれませんが、いつもの伝統的な八木節も素晴らしいですが、今回のようなものも面白かったです。



皆さんが持ち寄る、多岐多彩な万国のお料理も楽しみの一つで、特に異国の料理の作り方は興味深い人が多く、レシピ話に花が咲くグループもありました。

また、昨年から「ぐんま国際アカデミー」に足利から通っている生徒さんも ボランティアスタッフとして参加していて、今回は「カラオケバトル」で有名な、あしかが輝き大使の堀 優衣ちゃんもお手伝いに来てくれました。プログラムにはなかったのですが、飛び入りで快く歌ってくれて、パーティーに花を添えてくれました。伸びのあるパンチの利いた歌声にいつも感動します。優衣ちゃんの歌に続き、スプリングフィールドの学生との「英語の歌」の交流も始まっていました。

ポットラックパーティーも、年々いろいろな方々が参加されるようになり、幅の広い親交を深める場になっています。これからも、市民と海外の方を繋ぐ国際交流の場になっていく事と思います。

学習者の感慨

榎澤 秀彦

どんな企画にも、長く続けていればマンネリ化はあります。そして、それに気づいた関係者は初心に戻ったり、改善策を模索したりして前に進みます。

外国人支援の日本語教室もそうです。先輩方が創設した足利市の日本語教室も、その後の講師の方々の努力で継続され14年となりますが、最近は個人的にマンネリ感を強く感じ始めていました。

この日本語教室には実に多くの外国人学習者が出入りし、12年も続けている人もいれば、2、3回でもう来ない人もいます。教える時は、多くの場合、教材に沿って、文字を教え、発音させ、意味や使い方を教え、誤りがあれば正し、時には思ってもみなかったような日本語の質問を受けて、講師もそれを宿題として勉強し、次回に備えるなどしています。

「正しく教えて、しっかり学ぶ」、教室としてはこれだけで十分な筈で、これを積み上げれば、日本語習得の目的は達成されるでしょう。しかし、「学ぶ側としてはどんな感慨を持って母語でない日本語を学んでいるのか」ということに、講師は少し無頓着になっていた嫌いがあるのではないかと感じています。

それをはっきりと気づかされる切っ掛けがありました。

ヤン・イー（楊逸）さんという中国人女性の作家がいます。1987年に来日し、



17年間も日本語を学び、お茶の水女子大を卒業した才媛で、平成20年の芥川賞受賞者です。

彼女の言語習得感覚とは窓のようなもので、「新しい言葉を習得すると、新しい窓が開いて新しい風景が目の前に展開するような感動がある」と言います。日本語の純言語（身振り手振りや表情に頼らない「書き言葉」）を駆使できる、極めて高いレベルの外国人作家にと言える表現でありましょう。

同様に、足利の学習者も、少しずつレベルアップしていく段階で、やはりその時々で驚きと感動を覚えているのだろうと想像でき、より良い感慨を味わえるように講師は接して行かねばならないと改めて自覚します。彼等が、しっかりと日本語を学び、地域社会に自立共存し、且つ、外国人の多文化パワーを活かして地域に参画出来るようになる為の、その一助として、我々の日本語教室の最初はどのようなであったかを見直し、積もった古い埃は叩いてブラッシュアップしようと、最近では、講師同士の勉強会を続けているところであります。

そして、日本語ボランティアは、「無理なく、楽しく、長続き」がモットーであります。

インフォメーション
Information

「ようこそいらっしゃいASHIKAGAへ2017」

高校生を対象とした英語での足利案内ボランティアの養成イベントです。

- 日 時：平成29年9月23日（土・秋分の日） 午前8時30分～午後4時30分
- 会 場：足利市内、名草ふるさと交流館
- 内 容：外国人とまちなかウォーク・そば打ちなどの日本文化体験

「海の向こうのくらし ～ニカラグア編～」

中央アメリカ・ニカラグアでの青年海外協力隊の活動（助産師）についてと、現地の生活や文化についてお話しいたします。

- 日 時：平成29年10月1日（日） 午後1時30分～3時
- 会 場：足利市生涯学習センター
- 講 師：小林千紘さん

第25回 外国人による日本語スピーチコンテスト

- 日 時：平成29年10月29日（日） 午後1時～5時
- 会 場：足利市民会館 別館ホール
- ※ 出場者募集中

ポットラックパーティー

「姉妹都市スプリングフィールド市訪日団歓迎」

- 日 時：平成29年11月4日（土） 午後5時～6時30分
- 会 場：未定
- ※ 得意な料理を一品お持ちください。マイ皿、マイ箸、マイカップ持参にご協力ください。

多文化共生推進事業「ベトナムデー in Ashikaga 2017」

- 日 時：平成29年11月11日（土） 午後1時30分～4時
- 会 場：足利市民会館 別館ホール
- 内 容：・在住ベトナム出身の方々による座談会
・小栗久美子トーク&コンサート
・ベトナム民族楽器「トルン（竹琴）」演奏とトーク
・ベトナム料理の試食、ベトナム紹介 等



募集しています

国際理解講座等の講師

学校や公民館などでの外国文化、生活の紹介、外国料理の指導その他ご協力して下さる外国人を募集しています。

ホストファミリー

ホームステイ、ホームビジットにご協力して下さる家庭を募集しています。姉妹都市スプリングフィールド市訪日団の引率者、県内の大学に在学中の留学生やALTなどの受入をお願いしています。

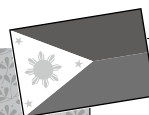
特集記事
中国語クイズの答え

手紙→トイレトペーパー
老婆→妻
大家→皆さん

大丈夫→立派な男
勉強 →仕方なく
娘 →お母さん



第二の故郷



派遣国 フィリピン
(2013年7月～2015年3月)
養護隊員 (障害児教育)

元青年海外協力隊 沢谷 千亜紀

蒸し暑いバスの中、窓を開けるとふわっと広がる草の匂い。視界に広がる海に山に、ちっちゃな家に住む人々の暮らし。フィリピンの首都マニラから私の住んでいた任地、パロタックビエホ町に向かうには、飛行機で地方都市イロイロに向かい、市街地からボロボロのバスに揺られていく。私は車窓から見える風景が大好きだった。2年前の今頃は一人で乗っていたけれど今回は違う。隣には夫。協力隊時代の同期でもある。もともと栃木県内で教員をしており、2015年3月に任期を終了した私は、4月に教員として復職をし、11月にフィリピンとタンザニア間で超遠距離恋愛をしていた彼と結婚した。そして今、ブチ新婚旅行中なのである。目的は、任地の大好きな人たちに夫を紹介すること。ホームステイしていたラリンおばさんの家に泊めてもらうことになっている。学校の生徒たちや同僚のジェーンは元気かな……。

私は2013年7月から養護隊員としてフィリピンに派遣された。要請内容は、知的障害児の指導であって、公立小学校に隣接されている知的障害学級が私の職場であった。担任のジェーンと一緒に教室運営をした。派遣当初は、フィリピンでの教室が日本の特別支援学校とあまりにも違って驚くばかりだった。まず、3歳から30歳までの人々が通ってくることに驚いた。生徒たちは気が向いたときに午前か午後に登校する。小さな教室にいきなり20人以上の生徒たちが押し寄せる日もあったし、一人も生徒が来ない日もあった。教員の態度も日本のそれとはかなり違った。授業中に携帯をいじるのは当たり前。誰かが自分の教室に入ってきたら、授業を中断しておやつを食べながらおしゃべりをするというのがマナー。初めの頃、私は教員たちの態度に怒ってばかりいた。そんな中で、徐々に環境を受け入れ、フィリピン人らしくなっていく自分がいた。それと同時に活動も軌道に乗ってきた。私は教室運営の傍ら、村に出向いて、学校に通えない障害児の家庭訪問をするようになった。名付けて「バランガイ訪問教育」である。バランガイとは、フィリピンの言葉で「村」とか「地域」を意味する。日本では障害の度合いに関わらず、すべての子どもに教育が保障されているのに対し、フィリピンでは教育を受けられる障害児は5%未満とされている。理由として教員の不足、教室やトイレが整備されていないことが挙げられる。それに加えて、貧困層の家庭では学校に行くための交通費が払えないことや教育に対する意識の低さも原因とされる。その状況を何とか変えられないかと考え、活動を実行した。とは言うっても、実際に訪問できる子どもの数は限られており、私の活動自体は微々たるものだった。しかし、他の地域で活動する後輩隊員たちが、自分の地域でバランガイ訪問教育を始めてくれたのだ。予想外の成果で、とても嬉しかった。私の活動は、地味で単調で、小さなものだったが、任期を終えたとき、自分の力を出しきれた充実感をもつことができた。約2年間の道のりは決して順調だったわけではない。ジェーンと口論になることもあった。本気で協力隊をや

めて日本に帰国しようとしたこともあった。何度一人で泣きじゃくったことか……。それでも最終的に地域や人々を愛し、自分の納得する活動をすることができたのは、ジェーンをはじめとする多くのフィリピン人が私のことを受け入れ、見守ってくれたからだと思う。だからこそ、日本に帰国した後も、大切な宝物のようにフィリピンでの日々を想い、こうして帰ってくることができる。第二の故郷というのは、こういう場所のことをいうのだろう。

なつこ
もうすぐ待望の赤ちゃんが生まれる。娘の名前は「南紬子」。私たち夫婦の愛する南の国、フィリピンとタンザニアを想って名付けた。私たちがあのかとき、協力隊としての夢を追いかけて、汗だくになりながらやりたいことを実現していったように、娘にも自由に夢を「紬」いであってほしいと思う。そして、家族みんなでフィリピンの大切な人たちに、また、会いにきたい。



学校行事のパレードにて



朝の会の様子

青年海外協力隊の国内外での活動を支援する、
一般社団法人 協力隊を育てる会の公式ページです。
<http://www.sojocv.or.jp/>

▼日々の活動はこちらで更新中▼

<https://www.facebook.com/sojocv>

▼あなたが、わたしが、つくる未来「GLOBAL SPROUT」▼

<https://www.facebook.com/globalsprout>



Join Us! Enjoy Together!

「トーストマスターズクラブってなに?」とよく聞かれます。Toastmaster は「乾杯の音頭を取る人」という意味で、Toastmasters Club は話し方、パブリックスピーチ、リーダーシップ等を学ぶ国際的な非営利の教育団体です。世界142か国に34万人以上の会員がいます。国内では北海道から沖縄まで176のクラブがあり、お互いに切磋琢磨し合いながら楽しく活動をしています。

足利トーストマスターズクラブ設立のきっかけは、大学時代のESS仲間から群馬トーストマスターズクラブの話聞いたことでした。そこで、信頼している友人たちに話をもちかけ、他クラブにゲストとして参加したり、資料を載いたりして見よう見まねで始めました。最初は足工大附属高



足利トーストマスターズクラブ Founder 根岸 久江

校の1室を借りていましたが、その後生涯学習センターに移り、現在は21名、20代から70代までの会員が毎月、第3土曜日、午後3時から5時まで英語で例会を楽しんでいます。例会ではスピーチとそれに対する論評、テーブルトピック(即興スピーチ)等が行われ、タイマー等の役割を分担しながらリーダーシップも身につけます。この「Learning by doing」が英会話スクール等とは違うよさだと思います。また、やる気のある人はどんどん挑戦し、失敗も許される、そしてその失敗から学び、大きくなっていくことが素晴らしいと思います。

特筆すべきは年2回のスピーチコンテストです。春季コンテストは、エリア(足利は新潟・群馬・宇都宮と一緒に)⇒ディヴィジョン⇒全国⇒世界大会へとつながります。私は一昨年、マレーシアのクアラルンプールで開催された世界大会にも参加しましたが、凄いです。今年は、日本語・英語コンテスト両方とも足利がエリアを代表し、ディヴィジョンコンテストで3位入賞を果たしました。

9月にはエリアコンテストを足利主催で行います。時期がきましたらチラシや足利トーストマスターズクラブのホームページをご覧ください。

Join Us! Enjoy Together!

<http://1971647.toastmastersclubs.org/>

28か国200名の留学生と国際交流業務に携わって

足利工業大学 国際交流課長 佐々木 節

足利工業大学は2010年より、大学内に国際交流課として留学生サービス部門が設置されました。留学生の生活支援や留学生募集業務を中心とするものです。当時の留学生数は54名でした。

留学生の生活向上のため近隣のアパートのオーナーさんに協力と理解を得て、留学生の入居に関わる様々なサービスの向上に努めました。事情をお話し、外国人が入居にあたり、すぐに生活ができるようにオーナーさんに協力をお願いしました。同時に足利市内のレストラン、コンビニ、工場をまわり、留学生のアルバイト求人をお願いしました。当初、外国人の採用には概ね消極的でしたが、徐々に理解を得ることができて、留学生のアルバイト雇用も安定してきました。

一方で、日本国内にある日本語学校訪問をして都内で開催される留学生進学説明会に積極的に参加し、留学生募集を少しずつ拡大していきました。しかし、都内の日本語学校にとって足利工業大学は知名度の点でなかなか認知されませんでした。このころは募集で大変苦戦を強いられました。

この間、在学の留学生には徹底してサービスを向上するよう努力してきました。留学生はたった一人で外国からきて日本語を勉強し、日本で留学生活を開始します。親戚の人がいるでもなく、相談する人もいません。ソーシャルサポートがない状況下ではたくさんの困難があります。そこで、すべての心配がなくなるよう徹底した支援を心がけて留学生に接しました。留学生から相談を受けたら、その日のうちに解決するよう努めました。

さらに、留学生の就職が決まったら、出身の日本語学校にすぐに報告しました。ある日本語学校の先生は、時に涙して喜んでいただけました。多くの日本語学校の先生が親身になって留学生にケアしています。こうした広報活動が日本語学校に浸透していき、だんだんと評価を得ることができました。広報活動の効果が少しずつ現れ、年々増加し、今春28か国200名

に達しました。

2014年8月、日本語学校の教職員が留学生に勧めたい進学先として、「日本留学アワーズ」の理工系部門で本学が大賞を受賞しました。本学の留学生に対する取り組みが全国の日本語学校で組織する日本語教育振興協会に高く評価されたのです。その後2016年まで3年連続して大賞を受賞することができました。このニュースを知った留学生は皆喜んでくれました。海外にいる足利工業大学のOB、OGからもお祝いのメールがたくさん届きました。アフリカ諸国の大使館からも受賞記念祝賀会にご出席いただきました。留学生にかかわる仕事をしている者として、日々尽力している職員とともに大変うれしく思いました。

今現在、足利市観光協会からは足利市内のツアーを年一回ご提供いただき、足利ライオンズクラブからは様々なご支援を、八木節伝承会からは八木節の講習会を留学生にご指導いただき、地元の夏祭りには神輿担ぎなど留学生が経験させていただいています。地域と共同して留学生を支援しているとして、日本留学アワーズの評価の対象になっています。

近い将来、足利市に海外からたくさんの若者が足利工業大学に留学していただき、足利市で生活して、多くの市民と接して、留学した思い出の町になってくれたらいいと思っています。



表紙の説明

篠原道生展(同時開催 山本陽子展、岡崎清一郎展、春山清展)

2017年8月5日(土)～10月22日(日)

開館時間:午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

観覧料:一般600(480)円、高校・大学生400(320)円、中学生以下無料 (内は20名以上の団体料金)

会場 足利市立美術館

休館日 月曜日(ただし9月18日、10月9日は開館)9月19日(火)、10月10日(火)

篠原道生(1960-92)は栃木県足利市に生まれました。4歳まで同市月谷町で過ごし、7歳のとき港区北青山へ移りました。中学卒業後、親元を離れ青梅市の大東農場で生活します。農場に近い青梅東高校に進学、牛の世話を経験してから登校しました。教師から美術の道を勧められ、多摩美術大学油画専攻に入学、大学院まで進み、87年、修了しました。同年イタリアに4ヶ月間滞在し、帰国後、画家になることを決意しました。制作に没頭しますが、92年12月10日早朝、自ら命を絶ちました。

篠原の作品は静謐な抒情と幻想をたたえています。登場する少年少女は彼の分身であり、純粋な魂の象徴でもあります。本展は画家の全貌に迫る回顧展です。

足利市国際交流協会会報 第66号

2017年8月25日

足利市国際交流協会総務委員会広報チーム

足利市国際交流協会事務局(足利市生涯学習センター2階)

TEL 0284-43-2412 / FAX 0284-43-2418

<http://www.ashikaga-inter.jp/>

E-mail: info@ashikaga-inter.jp

(入会希望・ご意見・ご要望などお寄せください)